

クリスチャン・パーソナリティ の特質について

斉藤良子

はじめに

現代の一般教育の目的は個人を「望ましい人間にまで形成する」ことである。「望ましい人間像」とは自主自律の人間であって同時に全体的な人間のことであり、またよい社会人のことである。ではキリスト教教育の目的は何であろうか。それは「クリスチャン・パーソナリティの形成」であるといえる。ガラテヤ書4章19節には「私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで……」とあり、エペソ書4章13節には「ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです」とあるように、キリストの救いにあずかって内部からつくりかえられた者のうちに新しい人格がつくられることである。これは人間教師の愛や努力によるのではなく、神の恩寵のわざであり、恵みであり、奇蹟である。

この小論においてキリスト教教育の本質的な問題をとりあげて考察をすすめたい。第一に「パーソナリティにおける信仰の位置づけ」、第二に「キリスト教教育の根本問題」、最後に「クリスチャン・パーソナリティの形成」という順序ですすめていく。

I. パーソナリティにおける信仰の位置づけ

パーソナリティという語は広く一般に用いられているが、まことに多義多様であってはっきり定義することはむずかしい。しかし大抵の場合個人の全人格的なあり方を指しており、個人的な特徴のある行動を中心にして用いているようである。

パーソナリティを日本語に訳すと人格となるが、普通「人格」とか「人格性」というときは価値的・倫理的意味を多分に含んだものとして用いている。すなわち道徳的良心をもち、他の人と協調することができ、また社会的責任のとれる人間という意味にとられている。たしかにそれらは人格の一部であるが、全人格的なあり方を示すものではないし、全人的行動のしかたをすべてふくんでいるとはいえない。このような誤った人格概念をただすことがまず必要になってくる。

人格をもっているのは道徳的で品行方正な人だけでなく、大人でも子供でも、また責任能力喪失者でもすべての人がもっているものなのである。新生児は生れた瞬間から人格を形成しはじめる。

パーソナリティの意味をはっきり理解するために語源にさかのぼってみると、ラテン語のベルソナ (persona) からきていることが分る。ベルソナは元来演劇用語で、役者のかぶる仮面 (mask) をさしていた。その後意味がかわって劇中の役柄や登場人物をさすようになった。¹

シセロ (Cicero ; B.C. 106-43) の書いたものではベルソナの意味が少くとも4通りに使われているということである。すなわち

- 1) 実際にはそうではないが、他人にそう見えているもの
- 2) 人がその人生において演ずる役割
- 3) 人間のもっている性質の総体
- 4) 区別と威厳

であって、今日使われているパーソナリティの意味はすべてこれらの4種類の意義

注 1) キリスト教倫理辞典 (日本基督教団出版局, 1969) p. 198

のどれかから分れてきているということである。²

第一の意味はペルソナの本来の意味である仮面からきている。つまり真の自己でない外面の見せかけという意味である。第二の意味は劇中で演ずる役者の役割をいうようになり、やがてそれはその役を演ずる人物と混同されて、個性のはっきりした人という意味に使われるようになった。第三の意味は一般に人間のもっている性質の総体として広く使われるようになっていく。最後の第四の意味は今日でも威厳という意味に使われることがある。³ このような語源的な意味がパーソナリティという語の中に雑多な色彩をとりいれているので、パーソナリティ概念がきわめて多くの意味と複雑さをもつようになったのであろう。

パーソナリティはいくつかの部分から成る複雑な構造をもっているといわれる。大きく分けると、生理的欲求を中心とする下層部、認識、知的活動及び社会性などさまざまな意志的活動を中心とする中層部、そして価値、理想、良心など「べきである」と命令する部分から成る上層部に分けられる。⁴ G・オールポートのパーソナリティ理論によると、パーソナリティの構造はやはり3つの層から成ると考えている。最底辺には欲求がある。パーソナリティの健全な発達のためには欲求が適度に満たされることが必要である。第二の層は社会性、すなわち人間関係である。人間関係の調和をはかることはよいパーソナリティの発達のために重要である。第三の層は真のパーソナリティを形成する上において非常に大切な層である。それは人生目的とでもいうべき層で、正しい人生目的を指し示すことによって人格の統合原理が与えられるというのである。それは人間にとって自然に発生するのではなく、両親とか教師によって教えられ、示されなければならないものである。この層の最上部に信仰があるという。⁵

フロイトらの精神分析学派はパーソナリティの下層部をイドと呼び、快を求め、不快を避ける快楽原理の支配する部分であるという。中層部は自我またはエゴとよ

ばれ、イドの動物的な要求を統制するはたらきをもっていると考える。すなわち現実を考えてイドを統制する現実原理がはたらくというのである。上層部は超自我またはスーパーエゴと呼ばれ、道徳的な考えの貯蔵庫である。超自我はエゴに働いてイドの社会的に容れられないような傾向を抑止する。超自我とイドはたえずたたかい、その葛藤をエゴが解決しようとしている正常な人においては葛藤は円満に解決されるというのである。なお超自我はとくに両親との間で形成される部分が大きいといわれる。⁶

G・オールポートのパーソナリティ理論では信仰の位置づけがはっきりなされているが、幼児の場合を考えると、このような人格構造の最上部はまだはっきりと分化していないので、信仰が幼児の全生活の統合原理となるほど明確に体系化していない。したがって価値体系の重心は漠然とした形でしか感じられないことであろう。幼児期においては両親や教師の価値観・倫理観が影響を与えて、漠然とした方向づけをする程度にとどまるのであろう。そしてもっと全体的に成長発達して人格の統合原理が求められるようになったとき、それをキリスト教の信仰に求めることが容易になるための準備をすることができるのである。⁷

人格形成と環境とは密接な関係をもっている。勿論人格形成には素質も環境もともに関与しているわけであるが、環境とくに社会的影響の重要性を強調する学者が多いことは周知のことである。その環境は客観的環境というよりむしろ主観的に認識され、解釈された環境である。人はこういう環境の中で分化していく。個人の中にはその人の中心的部分と周辺部分が分化している。中心的部分を自己 (self) とよんでいる。自己をどのように認めるかは個人にとって重要な意味をもつことになる。自己の描く理想像と現実像との差が大きい場合には劣等感に悩んだり、苦しんだりする。もし理想像と現実像の差があまりないならば、優越感をもって誇った

注 2) 依田新「性格心理学」(金子書房 1968) p. 36.

3) 同上 pp. 36-37.

4) キリスト教教育辞典(日本基督教団出版局 1969) p. 422.

5) G. オールポート、「人間の形成」(理想社 1959)

注 6) サージェント、「現代の心理学」(誠文堂新光社 1951), pp. 162-163.

7) 日本基督教団宣教研究所才三分科編「キリスト教幼児教育の原理」(日本基督教団出版部 1967) p. 54.

りする。自己が変わると個人の行動の仕方も変わってくる。

G. オール・ポートは「パーソナリティとは人が現実にあるところのものである」⁸⁾ といひ、さらに、「パーソナリティとはその環境に対するその人の個性的な適応を規定する精神的・身体的諸体系の力動的体制である」⁹⁾ といっている。彼はこの定義をはっきりさせるためこの中の重要なことばについて説明している。

1) 規定する→パーソナリティは何ものかであると同時に何ものかをなすものである。それは単なる行動とか活動ではなく、それら個々の活動の背後にあり、また個体の中にあるもので、パーソナリティを構成する体系は「規定する傾向」なのである。

2) 力動的体系→パーソナリティの体制はたえず発展し変化するものと考えられなければならない。故に「力動的」という規定が必要である。

パーソナリティの形成は子どもが生まれたときにはじまる。親がその子の人格を認めるとき人格は発達する。乳児が空腹で泣くとき母親はミルクを与える。おむつがぬれて気持の悪いとき泣いて知らせると、母親はすぐとりかえる。このように乳児の要求が正しく受け入れられるとき、彼は母親に対する信頼感を学び、正しい親子の関係が芽生えてくる。子どもの小さいときには母親との間に依存関係がつくられるが、だんだんと成長するにつれて教師・友人間にも同じような関係がつくられる。このことはパーソナリティ形成上きわめて重要な意味を有するのである。

既に述べたように、パーソナリティは個人の全人格的なあり方や行動に関係するものであるから、その形成はキリスト教教育と密接な関係をもっている。人間の全存在は神の創造によるものであって、現在神の支配下におかれている。したがってパーソナリティの下層部・中層部・上層部はすべてキリスト教教育の対象となる。特に上層部は人間の行動に方向を与える積極的な役割を果しているので大切である。人生の目的をどこにおくか、また何を規準にして行動を決定するのかということは、個人の全生活の統合原理となるきわめて重要な問題である。

注 8) G. W. Allport, Personality, 1957, p. 46.

9) Ibid, p. 48.

II. キリスト教教育の根本問題

創世記の1章26, 27節に人間創造の記事がある。「そして神は『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのものを、地をはうすべてのものを支配させよう。』と仰せられた。神はこのように、人を御自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」神の創造された最初の人間は神にもっとも近い被造物として罪のない存在であった。すべての被造物の中でもっともすぐれたもので、地上のすべてのものを支配する立場におかれた。現実のみじめな人間の状態を考えるまえに、まず神の像にかたどってつくられた人類の始祖アダムについて見てみたいと思う。

人間における神の似像をどのように解釈するかは大層重要な問題である。ギリシャ・ラテンの教文はこれを2つの意味に考えた。一つは「形像」において神の像であるということで、人間の外形のうちそれを認めようとするのである。もう一つは「相似」という意味において解釈している。つまり人間が倫理的に精神的に神に相似したもものとして造られたというのである。¹⁰⁾ もしこの解釈が正しければ、人間は肉においても霊においても神に似ているということになる。

カルヴィンは「神の栄光は、人間の外形のうち示されているが、その似像の適当な位置が魂の中であることは疑いない。わたしは、われわれを獣と区別している外形もまたわれわれを一層神に近く引き上げているということを確認する。ただはっきりさせておかなければならないことは、これらの外的なものにあらわれ、いなひらめく神の似像は霊的であるということである。神の似像はアダムが正しい判断をさずけられた時、彼が理性によって、その情を制御して、彼の感覚のすべてが正しい秩序にととのえられていた時、そして彼の性質の優越性において、真にその創造

注 10) 小林公一「キリスト教教育」、(日本YMCA同盟 1959) p. 73.

者の優越性に似ていた時に、アダムがもっていた完全な姿を指すのである。」¹¹と述べているが、神の似像は知性・感情をふくむ人間の性質のあらゆる面における健全さということであったと思う。

先に述べたように、もし神と人間が本質的な意味において相似しているとするならば、それが外形的な意味であっても、また霊的な意味であっても、旧約聖書の神観及び人間観に反することになる。創世記17章1節に「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。」とあり、またイザヤ書40章28節に「あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地のはてまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。」とあるように、神は全知全能であり、完全であり、永遠である。しかしながら人間は土地のちりて造られたものであって、その肉体はやがて亡び去る物質であり、この点では他の動物と少しもかわらない。また霊性の面でも創造物なる神と被造物なる人間との間にはっきりした区別のあることを聖書は教えている。詩篇8篇5節に「あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。」と記してある。

神の似像の解釈を、人間の肉体は亡ぶけれど、その精神においては本質的に神と同じであって、その霊的生命は永遠不滅であるとする者もいるが、これはヘレニズムの思想であって、キリスト教とは縁もゆかりもない。

神と人間との相似を本質的なものに求められるべきでないことは明確である。それはもっと関係的なものに求められるべきであると小林公一氏はいう。神は人間にすべての被造物を支配するという特別な位置を与えられた。神の人間に対する関係はちょうど人間がすべての被造物に対する関係と同じであるという。また、「神の像」*imago Dei*の問題は、キリスト教における人間の人格性・主体性の問題であるという。キリスト教信仰によると、人間は人格性それ自体を神に負うのであって、人間は神と対等である筈がない。人間の人格性は神からのよびかけに対する応答性

として把握される。しかし現実には人間は罪人であって、神の像は喪失されていると説明している。¹²

カルヴィンはキリスト教綱要の中で「神は人の魂に、善と悪、正と不正を見わけ、理性の光によって、追い求めるべきものと避けるべきものを見いだし心を与えた。これに神は選択の基礎をなす意志を結びつけた。人間の原初の状態は、これらのかがやかしい機能があるため光輝なものとされた。この十全なる姿において人は、自由意志が与えられ、それによって、もし彼が望むならば、永遠の生命を獲得しえただけである。」と人間創造の中に示された神の特別な配慮について説明している。¹³

墮落以前の人間は神と親しく交わることでできる存在であった。創世記3章8節の記事から、神と人間の交わりの様子を推察することは容易である。しかし「神の像」は墮落によって壊滅した。聖なる神と墮落した人間との間に深淵が横たわり、断絶状態におかれた。このように人間の墮落はアダムの不従順にはじまった。「アダムの精神生活は、彼の形成者との結びつきにあったのであるから、それからはなれることは彼の魂の死であった。」¹⁴とカルヴィンがいつているように、アダムの不従順の結果すべての秩序はくつがえされてしまった。彼のうちにあった神の像は壊滅し、無知・不法・不正という霊的な病気におかされていった。この災厄をこうむったのはアダムだけでなく、彼の子孫である全人類がまきこまれていった。これが原罪といわれる遺伝的腐敗状態である。

この問題について教父たちは多くの議論をたかかわした。ペラギウスはアダムの罪は彼自身を亡ぼしたのであり、その子孫には何ら害を与えていないといい、罪の遺伝を否定し、それは模倣によるものだと主張した。一方アウグスティヌスは人間の生得的墮落を強調した。カルヴィンは原罪を規定して「原罪とはわれわれの性質の遺伝的墮落腐敗であって、魂のあらゆる部分に滲透して、われわれを神の怒りを受けやすいものとし、われわれのうちに「肉の業」（ガラテヤ書5章19節）を生

注 11) ヒュー・カー編 「カルヴィンキリスト教綱要抄」, (新教出版社 1959) pp. 43-44.

注 12) 小林公一 前出 p. 74, pp. 81-82.

13) ヒュー・カー編 前出 p. 47.

同上 p. 59.

みだすといつてよかるう。」¹⁵ といっている。

墮落した人間は全き罪人であり、悪以外のものに関心をもつことも熱心になることもできなくなっている。ロマ書3章10節に「義人はいない。ひとりもない。」と記されているように、すべての人間は罪の重さに圧倒されているので、どうすることもできない。ただ神のあわれみによって救い出されなければ亡びを免れることはできないということを、このみことばは間接に教えている。

人間は現実において罪人であり「神の像」は失われているが、キリストの十字架の救いの道が示されており、神の恩寵のもとに立たされている存在なのである。この世界に実存する人間に対する神の基本的な愛の働きは、キリスト・イエスによる赦罪・和解・義認である。この働きによって救われた者は深淵をへだてて見えない神を愛し信じるという方法で、永遠の神ともう一度交わることが可能になる。そして侵すことのできない人格的存在となるよう基礎づけられるのである。¹⁶

ティーリングのように人間は神の像にかたどってつくられたということのみを強調したり、あるいはゴーガルテンのように人間は罪人であるから、ただ亡びを待っている存在で将来には何の希望もないと考えるのも正しくない。聖書によれば、人間は罪人であるけれど、今や神の恩寵のもとに立たされているものとして捉えなければならぬ。キリスト教教育が考えられるとき、神の恩寵によって被教育者はキリスト教教育のおこなわれる現実の中に入ることができるのである。

聖書信仰に対立する自由主義神学は神の「内在思想」と「神の像の思想」を結びつけるところから、自然人としての人間は生れながらにして神の国の一員であって、人間の成長発展ということは神の国の中であっての発展を意味するという。人間の中には無限の可能性がひそんでいるので、教育によって、それらをひき出すとき、彼の中にキリストの人格が形成されるという。誠に魅力的な解釈であるが、聖書の教えと全く相容れないものである。

キリスト教教育の歴史の流れをふりかえてみると、多くの教育者たちが必ず

注 15) ヒュー・カー編 前出 P. 61

16) 宮本武之助「現代キリスト教人間像」(新教出版社 1961), p. 128

しも正しい意味でキリスト教教育をしたとはいえない。彼らの中にはキリスト教の中心問題である人間の罪及びキリストによる救いには全くふれていない者がいる。たとえば有名なキリスト教教育者フレーベルやベスタロッチにしても、教育の基礎を神においてはいるが、罪とキリストの十字架に留意してない。彼らが強調しつづけたのは「神の愛」だけであった。

聖書信仰に立つキリスト教教育は、まず第一に人間の罪深さを自覚させ、悔改めてキリストの救いにあずかることの必要を説く。キリスト教教育の目的は信仰告白、神との交わり、信仰生活である。いかえると人間のうちにクリスチャン・パーソナリティを形成することである。この形成のわざは人間教師の努力によるのではなく、聖霊の働きによるのである。そしてクリスチャン・パーソナリティの完成はキリストの再臨のときはじめて与えられることを聖書は教えている。人間教師はこの聖なる神の働きに協力する者であって、一般教育の場合の教師のように教育の主体ではない。

神の像にかたどって造られた人間は神にそむき、墮落してしまったが、キリスト・イエスを通して神から愛の呼びかけを受けている。仲保者キリスト・イエスの和解の業は人間が神との正しい関係を回復することを可能にした。キリスト教の信仰とは、神がキリストを通してなされる愛の呼びかけに自己の全人格をもって応答することに外ならない。人間の現実の状態はきわめて悲慘であるが、今こそ神との和解のことばを語るキリストを追求していかなければならない。キリスト教教育の究極の目的はキリストご自身なのである。

Ⅲ. クリスチャン パーソナリティの形成

キリスト教教育の目的は1951年に日本基督教教育協議会カリキュラム委員会が「イエスを救主と信じ、父なる神との交りに入らせ、聖書に示された神の意志にしたがって生活させることである。」と決定したように、「信仰告白」と「神との交わり」と「信仰生活」の3つを目ざしている。これは時代を越え、国を越え、そして場所を越えた普遍的な目的である。しかし実際にキリスト教教育を行う場合、

その対象である現実の人間について考えないわけにはいかない。人間は心理的にも生理的にも制約されており、歴史的にも社会的にも規定されている。その人間がある状況のもとでいかに具体的に信仰を告白するか、またどのような信仰生活をするかが追求されなければならない。ここにキリスト教教育の目標としての人間像ということが問題になってくる。¹⁷

キリスト教教育の目的と目標を混同して用いてはならない。目的という場合はその教育全体に通じる目的のことをいい、目標という場合には段階的・漸次的なものとしての目的が考えられるからである。たとえば小学校教育を例にとっているならば、小学校教育の目的のほかに一年には一年の目標があり、二年には二年の目標があるということなのである。そしてそれらの目標は究極的には小学校教育全体の目的につながるのである。

さて、キリスト・イエスが主であることを告白し、神との交わりに入り、みことばに従って信仰生活をするということは、未熟な幼児にもできることなのであろうか。身体的にも知的にも社会的にも霊的にも未熟な子どもに信仰生活は不可能ではないかという意見も出てくる。しかし結論を先にいうならば、「幼児も信仰をもつことはできる。」のである。信仰とは神の恵みに応える全人格的な態度であるから、たとえ未熟であっても、幼児も一個のパーソナリティとして神の恵みを受容しうる存在なのである。¹⁸

幼児の信仰は単純素朴なものであり、これは年少期・青年期に入ってだんだん変化していく。少年期では幼児期の信仰が一層強められていくのが普通であるが、青年期に入ると身心ともに急激な変化を経験するようになり、今まで問題なしにもちつけてきた信仰に疑問をいだくようになる。この場合どうすべきかということは別として、だから幼児期や少年期の信仰は本ものではないとか、有害であるとはいえないと思う。

幼児の信仰を考えると大切なことは両親や教会学校教師の信仰と生活態度であ

る。反省と思想前の素朴で純真な幼児に対するキリスト教教育の唯一の方法は、両親や教師の活きた信仰にふれ、その生活態度を学ぶことである。信仰をもった人の活きた人格的な伝道が幼児伝道の唯一の方法ではなからうか。

信仰とは霊なる神の愛の呼びかけに応答することであるから、観念的なものと考えられやすいが、決してそうではない。クリスチャンは神信仰によってこの世のあらゆる愛着の絆をたち切り、自己を否定しながら神に従っていきこうとする。また神のために苦しみとする者である。しかし、神をひたすら愛することによって自己を表現しようとするのではない。彼は神を第一にして生きようとする。彼は神の愛に応え、神と交わることを切望する。彼は永遠なる神と愛の関係を保つことによって常に罪と死との力に対抗でき、勝利の生活をするができることを知っている。¹⁹

クリスチャンは神を知れば知る程神を愛し、人を愛する。彼自身の愛の決断や行動は小さく、弱々しく、罪とからみあっても、この破れだらけの愛の行動を媒介として神の聖い愛が隣人に迫るように隣人を愛そうとするからである。したがってクリスチャンはいつも神に用いられる器でありたいと願うものである。キリストに捉えられ、その愛によって新しくつくりかえられた者でも、この地上に生きている限りすべての人々と同様、さまざまな誘惑にとりかこまれている。そして自己を見失ってしまう危険性もある。しかし彼が信仰によって神と交わりを保っている限りにおいて、彼を落し入れることのできる者はいないことを知っている。²⁰

クリスチャン パーソナリティがキリストにおいて形成されることは、神の恵みであり、御霊の働きである。そしてそれは今、ここですでに現実である。「あなたがたは、古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです。」とコロサイ書3章9節・10節にクリスチャンの現在が明確に示されている。これは信仰の現在であって目に見えるところの現在ではない。²¹

クリスチャンはすべてを目のあたり見て生活しているのではなく、ただそれを信

注 19) 宮本武之助 前出 P. 191.

20) 同 上 P. 127.

21) 小林公一 前出 P. 133.

注 17) 小林公一 前出 P. 159.

18) 日本基督教団宣教研究所才三分科編 前出 P. 96.

じて生活している。したがってキリストの形が自己の中に形成される事実を信ずるのである。「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかしキリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」とヨハネ第一の手紙3章2節に記されているように、福音はクリスチャンの希望としてキリスト・イエスを宣べ伝えているので、キリスト再臨のときキリストに似た者となることを信ずることができるのである。

ではキリストに似たものとは具体的にいつて如何なる人格を指すのであろうか。ガラテヤ書5章24節に「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまな情慾や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」とある。「キリスト・イエスにつく者」とは御霊によって歩むもの、御霊に導かれる者のことをさす。「自分の肉を、さまざまな情慾や欲望とともに十字架につける」とは、神に背いていた人間生活が徹底的に清算されることを意味する。信仰において救いと聖化が成就するのである。御霊に導かれるとき人間の倫理生活は支えられ、つよめられる。多くの人格的倫理的な美德は御霊のやどるところに必然的にあらわれるのであって、パウロはガラテヤ書の中でこれを御霊の実と呼んでいる。御霊は人間に新たな動機を与え、内部から新たな者とする。御霊の実は、愛・喜び・平安・寛容・親切・善意・誠実・柔和・自制であるか、愛が冒頭におかれているのは、御霊の実の中心であって、他のすべての徳を統一する根本原理であるからである。

ガラテヤ書においてパウロは信仰と行為、福音と倫理が真実な意味で一つであることを説明している。御霊の実として示されている徳性はただ単に抽象的に考えられたものではなく、キリスト・イエスの人格の中に見られる諸要素である。キリストはクリスチャンにとって生きる目的であり、希望の根拠であり、また現在の倫理生活における活きた模範である。

更に、マタイの福音書5章3節から10節までのみことばの中に、クリスチャンパーソナリティの特質をみることができる。クリスチャンのもつ7つの特質が簡潔に、しかもいきいきと描写されている。「心の貧しいこと」「悲しむこと」「義に飢えかわくこと」「心のきよいこと」の4つは人間の神に対する心の姿勢に関する

もので、「柔和」「あわれみ」「平和をつくり出すこと」の3つは人に対する態度に関するものである。最後の「義のために迫害される」はクリスチャンパーソナリティが形成された結果として生ずるものであって、パーソナリティの一要素とはいえない。聖書註解者ダンメローは The Teacher's Commentary を引用して次のように説明している。

- Scheme of the Beatitudes (after 'the Teacher's Commentary)
- I The poor in Spirit
(From this fundamental condition the other virtues mentioned grow)
(The inner life towards God) (Its outward manifestation towards man)
 - II They that mourn answering to
 - III The meek
 - IV They that hunger after righteousness.... answering to
 - V The merciful
 - VI The pure in heart.... answering to
 - VII The peace makers
 - VIII The patient in persecutions (supplemental)²²

「心の貧しい者」とはルカの福音書にでてくる放蕩息子のように本心にたち返る者のことである。そのとき神の御前における自己の真の姿を知り、悔い改める。心から悔い改めた者は人に対して柔和・謙遜な者とならざるを得ない。悔い改めた者は十字架を仰いで罪を赦される。そして神との正しい関係を確立することを切に求め、上からあわれみを受ける。神の愛とあわれみを体験した者は人に対してあわれみを示さずにはいられない。十字架の救いにあずかった者は御霊の働きによって神のきよさにあずかる者となる。これはロマ書の課題の一つである聖化を意味する。御霊によって歩む者は神と人との和解の務めをなし、人の心に平安をもたらす者となる。クリスチャンパーソナリティはこれら7つの特質がこの順序にしたがって

注 22) J. R. Dummelow, A Commentary on the Holy Bible, (New York: The MacMillan Co., 1944), p. 638.

形成されるのであるといえよう。しかしある者は主の救いにあずかると直ちに義認・聖化の経験をして和解の福音に従事する。またある者はこのクリスチャンパーソナリティの7つの要素が形成されるのに長い年月がかかり、またこの段階を経るといふ。いずれにしてもキリストの心を心とする者は、あらゆる意味において義のために迫害を受けるにちがいない。しかしこのようなクリスチャンは何者もうばうことのできない主の幸いを受けるとキリストは言明している。

キリスト・イエスが山上の垂訓の中で描いたクリスチャンパーソナリティの諸要素を一つ一つかみしめながら学んできたが、これはきわめて高遠な理想像であって現実性に乏しいようにさえ思われる。しかし主の標準は人間のおもわくによって変えられるようなものではない。クリスチャンの現状がたとえどのようなものであろうとも神は彼がやがてキリストの形にかたどられることを忍耐をもって待っておられる。そして聖霊はそれを実現に至らせるため働いておられる。

クリスチャンパーソナリティは心理学でいうようにただ環境の影響をうけて形成されるというのではなく、キリストとの出会いと転機を得て内面的に新しくされることから始まる。そして幾度か脱皮を重ねて純粋な信仰へと成長せしめられるのである。

ルカの福音書8章には悪霊にとりつかれて肉慾と虚無の生活におちていたマグダラのマリヤの記事がある。彼女はキリスト・イエスに出会って人生の転機を体験した。彼女が生れかわったとき喜びと感謝、そして奉仕の生活がはじまった。彼女は最後まで主に従ったのである。キリストが十字架の上であがないのわざをなすとげられたとき、人々は苦悩と絶望の中に沈んでいたが、輝かしい復活の主に最初に会ったのはこのマリヤであった。かつて淫乱の汚れた女であったが、キリストによって、罪の中から救い出されたのである。

最後にエペソ書2章10節のみことばに目をとめたい。「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリストイエスにあって造られたのです。

神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」とあるようにキリスト・イエスにおける人間の再創造は全く神の働きであって人間の努力によるものではない。しかし無力な人間はただ手をこま

ぬいて神の働きをまつのみということではない。無力であるからこそ、キリストの満ちあふれる恵みを日々求めて、クリスチャンパーソナリティの成熟を旨として進む決意をしなければならぬ。神はクリスチャンの品性を完全なものにしようと、無限の忍耐をもっておられること、また苦しみ悩みのとき、臨在を示して力を与え立上らせて下さるといふ約束を覚えて感謝と服従の現在を送ることが、霊的成熟への唯一の道ではあるまいか。これはクリスチャンパーソナリティ形成に関するキリスト教教育の最大の課題であるといえよう。